

秩父樹液生産協同組合賛助会員入会申込書

貴組合の目的に賛同し、下記の通り入会を申し込みます。

申し込み口数	口
社・団体名*1	ふりがな
業務内容	
氏名	ふりがな
部署名	
住所	〒
電話番号	
FAX番号	
e-mail	
ご要望 ご意見	

※1 団体名：個人でご加入の場合は記載の必要はありません。

●年会費

1口10,000円（1口以上お願いいたします）

●振込口座

銀行口座：武蔵野銀行 秩父支店（店番 006）

口座番号：1088356

口座名義：秩父樹液生産協同組合 代表理事 山中敬久

●賛助会員の特典

- (1) 本組合が作成または発行する資料の提供
- (2) 本組合または組合員との情報交換のための懇談会等の開催



秩父樹液生産協同組合

〒369-1901 埼玉県秩父市大滝1805番地1

TEL：0494-55-0122 / e-mail：info@acermono.com

FAX：0494-55-0122

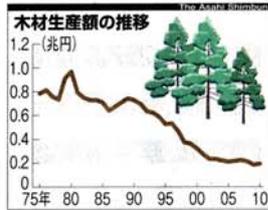
山を守り、シロップも特産

建築材としての需要が減ったスギやヒノキを伐採した後に、カエデを植える活動が埼玉県秩父市で始まった。カエデから採取した樹液を加工して特産品に育てるとともに、荒れる一方の山を守るのが狙いだ。



針葉樹林の中に自生するカエデ。推定樹齢は70年。この木からも樹液がとれた。埼玉県秩父市

スギ伐採、カエデ植樹



山林所有者やNPOメンバーらが今年6月につくった秩父樹液生産協同組合(山中敬久理事長、7人)。カエデの木一本につき年500円を山林の持ち主に支払い、樹液を採取して1リットル400円で観光土産品組合に販売する計画だ。樹液組合によると、カエデは樹齢20年から300年まで春になると平均20リットルの樹液がとれるという。8時

埼玉・秩父



秩父のカエデ樹液でつくったサイダーやアイス

間ほど煮込むとシロップができ、1本の木が毎年8千円の利益を生み出すと試算する。メイプルシロップとして知られるカナダ産は検査のため樹液では輸入できないため、組合は「国内産の需要はあるはず」という。

月刊「現代林業」(全林協)
12月号フォトレポート(11月10日発行)

読売新聞 2012.9.27

2012年(平成24年)9月27日(木曜日)

カエデ樹液で林業再生



秩父市の山林で樹液を採取するメンバー(1月撮影、秩父樹液生産協同組合提供)

組合作り採取・販売 秩父間伐中心脱却目指す

秩父地域の森林資源の活用と林業の再生を目指し、地元NPOと林業関係者ら7人が「秩父樹液生産協同組合」(山中敬久理事長)を設立し、カエデの樹液を採取して販売する試みを始めた。面積の8割以上を山林が占める秩父市で、地域活性化の一策として注目される。

組合は、組合員の所有する山林や、賃貸契約を結んで毎年5本500円で借り受けたカエデから樹液を採取する。一部のメンバーが10年ほど前から樹液の採取を始めていたが、品質管理やむやみな採取を防ぐため、今年6月に組織化した。樹液を採取するのは1月下旬〜3月初旬。幹にドリルで穴を開けて、直径2センチのプラスチック製の部品を差し込み、ホースをつなぐと1日1〜1週間程度でボリタンクにたまっていく。1本の木から平均20リットル程度、多い物だと90リットル採れるものもあり、今年は146本の木から約2トンの樹液を採取した。大半は地元の特産物

で煮込んだシロップで紅茶を飲ませてもらった。島崎さんが理事長を務めるNPO法人が調べたところ、秩父地域の森林60カ所で自生のカエデの森を確認した。今年、山林所有者の了解を得た146本から2800リットルを採取して販売した。「和メイプル」と商標登録し、地元菓子店や酒造会社でプリンやサイダーなどの製造を始めており、土

荒れる人工林、活用

荒れた山をどうやって守るか。全国各地が抱える共通の悩みの種だ。昭和30年代に多く植えられたスギやヒノキは徐々に伐採期を迎えている。林野庁の試算によると、2017年には全国の人工林のうち6割が、木材としての本格利用が可能な樹齢に達するところ。ところが、スギ木材の価格は1980年ごろを境に下落、製品価格はピーク時より約4割安くなった。国内の木材生産額は80年当時の2割程度に落ち込んだ。各地で模索しながらの取り組みが進んでいる。伐採されたまま放置されている木を「地域通貨」で買い取り、山林整備を支援する「木の駅プロジェクト」がその一つ。高知県のNPOが考案して09年に岐阜県で始まり、愛知、鳥取県などに広がった。千葉県山武市でも今年、地元有志によるプロジェクトが始まった。買いたった木材は木質燃料に加工したり、業者が卸したりする。



業者などへ販売され、お菓子やサイダーの材料などに使われる。樹液を活用するきっかけとなったのは、仕事の間伐液活用方法を研究していた」と話す。

「伐らない」モデル 仁多見俊夫・東大大学院准教授(森林利用学)の話 立ち木価格が低迷している現状では、伐採が進まず、スギ・ヒノキの放置林が広がる心配がある。カエデ樹液の活用は、木を伐採することなく、森林を守りながら継続的に収益が得られる「伐らない林業」のビジネスモデルになる可能性がある。

され、伐採しても収支が合わなくなってきた。間伐された木は、いまま放置された林は、土砂災害や花粉症を引き起こす要因ともいわれる。山中理事長は「カエデなどの広葉樹は、冬に葉が落ちて土が肥えるうえ、根をしっかりと張るので土砂災害防止にもなる」と期待する。(吉井亨)

地元商店に呼びかけ、来年度には地域通貨を発行して買い物ができるようにする考え。再来年には木質バイオマス発電所を造りたいという。(岡田佑樹)